

## 中国小論史略号證第九続

著者	中嶋 長文
雑誌名	神戸外大論叢
巻	41
号	4
ページ	37-57
発行年	1990-09-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00002083/">http://id.nii.ac.jp/1085/00002083/</a>



## 中國小說史略考證 第九續

中 島 長 文

13 傳奇之文、以至『蜃中樓』

寫印本『大略』八云、二、屬于異聞之後一類者。

金一二

李朝威『柳毅傳』〔廣記〕四百十九

儀鳳中、有儒生柳毅者、下第將還湘濱、先往涇陽與鄉人別、於道見牧羊女子、若有所伺、毅詰之、對曰、

妾洞庭龍君小女也、父母配嫁涇川次子而夫婿棄逸爲婢僕所惑、日以厭薄、既而將訴于舅姑、舅姑愛其子不能禦、迫訴頗切、又得罪舅姑、舅姑毀黜以至此。

言訖欲歔、託毅寄書洞庭、毅既至、三叩杜櫺如女教、因得隨武夫而入、見洞庭君致具、事達宮中、須臾宮平〔中の誤〕皆慟哭、洞庭君驚謂左右、使宮中勿哭、恐爲錢塘所知、毅問錢塘何人、曰愛弟也、昔爲錢塘長今致政矣。毅曰何故不使知、曰以其勇過人耳、昔堯遭洪水九年、因此子之一怒也、近與天將失意、塞其五山、上帝以寡人有薄德、故寬其同氣之罪而縻係于此。

語未畢而大聲忽發、天坼地裂、宮殿擺簸、雲烟沸湧、俄有赤龍長千餘尺、電目血舌、米〔朱の誤〕鱗火鬣項掣金鎖、鎖玉柱、千雷萬

霆激繞其身霰雪雨雹一時皆下乃擊青天而飛去毅恐厥仆地——因告辭——君曰不必如此其去則然其來則不然——俄而祥風慶雲融融怡々僮節玲瓏簫韶以隨紅裳千萬笑語熙々後有一人自然蛾眉明璫滿身綃縠參差迫而視之乃前寄辭者然若喜若悲令淚如絲須臾紅烟蔽其左紫氣舒其右秀氣環旋入于宮中君笑謂毅曰涇水之囚人至矣……有頃——一人披紫裳執青玉貌聳神溢立于君左右（君の誤）謂毅曰此錢塘也毅起拜之錢塘亦盡禮相接——君曰所殺幾何曰六十萬傷稼乎曰八百里無情郎安在曰食之矣君憮然曰頑童之爲是心也誠不可忍然汝亦太草々賴上帝顯聖諒其至冤不然者吾何辭焉

居數日、毅請歸、宮中贈遺甚厚。錢塘君欲以龍女嫁毅、而毅力拒、竟出洞庭適廣陵、鬻其所得未及百一、已大富、遂娶于張氏、亡、娶韓氏又亡。毅徙家金陵、娶范陽盧氏、則龍女也。毅後居南海、富陵侯伯而精神不衰、開元中歸洞庭、莫知其跡。開元末、其表弟薛嘏、遇毅于洞庭湖中、贈嘏仙藥五十丸、此後遂絕影響。

柳毅之事、頗爲後人所寄（奇の誤）、元尙仲賢據以柳毅傳書、今在元曲選十一集中。翻案者有張生煮海。折衷者有李漁蜃中樓。鉛印本は『史略』に同じ。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「柳毅傳」見『廣記』四百十九卷、注云出『異聞集』。原題無傳字、今增。據本文、知爲隴西李朝威作、然作者之生平不可考。柳毅事則頗爲後人採用、金人已據以作雜劇（語見董解元『絃索西廂』）元尙仲賢有「柳毅傳書」、翻案而爲「張生煮海」、李好古亦有「張生煮海」、明黃說仲有「龍簫記」。用于詩篇、亦復時有。而胡應麟深惡之、曾云、「唐人小說如柳毅傳書洞庭事、極鄙誕不根、文士亟當唾去、而詩人往往好用之。夫詩中用事、本不論虛實、然此事特誕而不情。造言者至此、亦橫議可誅者也。何仲默每戒人用唐宋事、而有『舊井潮深柳毅祠』之句、亦大鹵莽。今特拈出、爲學詩之鑒。」（『筆叢』三十六）申繹此意、則爲凡漢晉人語、尙或近情、雖誕

可用。古人欺以其方、即明知而樂受、亦未得爲篤論也。

『董解元西廂記』卷二云、俺平生情性好疎狂、疎狂的情性難拘束、一回家想麼、詩魔多愛選多情曲。比前賢樂府不中聽、在諸宮調裏却清數、一箇箇旖旎風流濟楚、不比其餘。也不是崔駰逢雌虎。也不是鄭子遇妖狐。也不是井底引銀瓶。也不是雙女奪夫。也不是離魂倩女。也不是謁漿崔護。也不是雙漸豫章城。也不是柳毅傳書。中華書局景印明嘉靖刊本

胡應麟『少室山房筆叢』卷三六(承魯迅所引)云、黎惟敬本學仲默詩、而與余游西山玉龍洞、有封書誰識洞庭君之句、暗用柳毅而不露、而語獨奇俊、得詩家三昧。總之不如不用爲善、然二君用事、偶經意不經意耳。若因此妄生分別相、則癡人前說夢也。

鹽谷溫『支那文學概論講話』第六章小説第三節唐代小説云、柳毅の話は宋以來歌曲に仕組まれ、元曲にては尚仲賢の柳毅傳書といふ雜劇があつて元曲選中に收められ、又同集に張生煮海といふのもあります。是も柳毅が龍女を娶つた話を翻案した、宋の小説に基いたのであります。即ち張生が東海龍王の女を娶らんと欲しましたが、龍王は之を許しませぬ。そこで張生は仙人より鍋鏝を與へられ、海水を汲んで之を煮れば、海中の水が全體鍋中の水と同じ熱度に高まります。龍王大に苦しみ遂に女を張生に與へたといふ筋書であります。又李笠翁の十種曲中の屢中樓は兩者の趣向を併せ取つたのであります。

李朝威については魯迅が「稗邊小綴」で「作者之生平不可考」と言う通り、ほとんど何も分らない。ただ『新唐書』宗室世系表、卷七〇上、蜀王房に、高祖の三弟蜀王蒨六代の孫として「朝威」の名が見える。父楓は徐泗節度判官、祖父夏日は都水使者とあるだけで、本人の肩書きはない。身近に名のある人物もいないので、生存の時期も分らない。六代の孫ということからはほぼ西紀八〇〇年、中唐のころと推測するのがせいぜいである。しかし、この人物と

「柳毅傳」の作者が同一人である可能性がまったくないとは言えない。一つは本文末に「至開元末、毅之表弟薛巖爲京畿令、謫官東南、……巖乃辭行、自是已後、遂絕影響。巖常以是事告於人世。殆四紀、巖亦不知所在。」とあることから、この篇の製作が、開元末（西紀約四〇）から五十年後、つまり元和五年（西紀八二〇）ごろに設定されていること。一方『廣記』卷三二には『傳奇』から採録した「蕭曠」という一篇がある。これは太和の處士蕭曠が龍女に遇つて龍のことについていろいろ質問する話だが、最初の問答が次のように記されている。「曠因語織綃（龍女名）曰、近日人世或傳柳毅靈姻之事、有之乎。女曰、十得其四五爾、餘皆飾詞、不可惑也。」これは太和中（八七一—三）に「柳毅傳」がすでに成立流布していたことを示している。この二つのことを考え合はすならば、時期的には宗室世系表に載る李朝威と「柳毅傳」の作者が合わないことはない。ただ確證を缺く。

魯迅は『廣記』のいう「柳毅」に「傳」字を附して「柳毅傳」としたが、『類說』に節録するのは「洞庭靈姻傳」と題する。『類說』が『異聞集』の題名を變えていないとすればこれに據るべきである。

#### ○尚仲賢「柳毅傳書」「張生煮海」

王國維『曲錄』卷三云、洞庭湖柳毅傳書一本 元曲選本 張生煮海一本 右十種（省略八種）元尚仲賢撰。仲賢、眞定人、江浙行省務官。『曲海總目提要』卷二「柳毅傳書。莊一拂『古典戲曲存目彙考』」卷二、四五頁云、柳毅洞庭龍女「南詞叢錄・宋元舊篇」著錄。宋官本雜劇有「柳毅大聖案」一本、金諸宮調有「柳毅傳書」。中略。元尚仲賢有「洞庭湖柳毅傳書」雜劇、明許自昌有「橘浦記」、黃說仲有「龍綃記」、楊珽有「龍膏記」、關名有「傳書記」、清李漁有「蜃中樓」、何鏞有「乘龍佳話」等傳奇。

又云、張生煮海一本元曲選本 右三種（略二種）李好古撰。好古、保定人、或云西平人。案宋末元初有兩李好古、一作碎錦詞者、自署鄉貢免解進士、一字敏仲、見趙聞禮陽春白雪。此李好古或即二人中之一、然曲家多以字行、則恐又是一

人矣。」李の作品は現存するが、尙のは佚した。『曲海總目提要』卷二。

○李漁『蜃中樓』

『曲錄』卷五云、蜃中樓一本 右十六種〔略十五種〕國朝李漁撰。漁、字笠翁。蘭溪人。寓居錢塘。」存。『曲海總目提要』卷二。

14 又有蔣防作「霍小玉傳」、以至謂此也

六五三

寫印本『大略』九云、屬于逸事之前一類者。

蔣防霍小玉傳（廣記四百八十七）

大歷中、隴西李益年二十以進士擢第、明年六月至長安、思得名妓、久而未諧。有媒鮑十一娘受生託、薦霍小玉、故霍王小女也、方求佳偶、亦知李益名、故約即定。

鮑既去生便備行計遂令家僮秋鴻於從兄京兆參軍尙公處假青驪駒黃金勒其夕生瀚衣沐浴修飾容儀喜躍交并通夕不寐  
遞明巾幘引鏡自照惟懼不諧徘徊之間至於亭午

既至、先見霍小玉母、命小玉出。

生卽迎拜但覺一室之中若瓊林玉樹互相照曜……既而遂坐母側母謂曰汝嘗愛念開簾風動竹疑是故人來卽此十郎詩也  
尔終日吟想何如一見玉乃低鬟微笑語曰見面不如聞名才子豈能無貌生遂連起拜曰小娘子愛才鄙夫重色兩好相暎才貌  
相兼母女相顧而笑

生遂寓于霍氏、二年日夜相從、其後年、生授鄭縣主簿、將至官、堅約婚姻而別。生到任旬日、求假覲親、則已訂婚于盧氏、其母素嚴、生不敢辭、遂與霍小玉絕。霍又不得生音問、遂臥病、有以生之踪跡告者、小玉招生、生自以愆期

負約、女又疾候沈縣、漸耻忍割、終不肯往。一日生在崇敬寺、有一豪士衣輕黃紵衫、狹弓彈、揖生與語、請蒞其居、已而暫近霍氏家、生欲止、竟抱持而進、推入車門、鎖之、報云李十郎至也。

玉沈縣日久轉側須人忽聞生來欬然自起更衣而出恍若有神遂與生相見含怒凝視不復有言羸質嬌姿如不勝致時復掩袂返顧李生感物傷人坐皆歎歎……玉乃側身轉面斜視生良久遂舉杯酒酌地曰我爲女子薄命如斯君是丈夫負心若此韶顏稚齒飲恨而終慈母在堂不能供養綺羅絃管從此永休徵痛黃泉皆君所致李君李君今當永訣我死之後必爲厲鬼使君妻妾終日不安乃引左手握生臂擲盃於地長慟號哭數聲而絕母乃舉尸置于生懷令喚之遂不復蘇矣

生爲之縞素、且夕哭泣甚哀、已而婚于盧氏、傷情感物、鬱鬱不樂。生既歸鄭縣、忽于帳外見男子、遂疑盧氏、終出之、而猜疑彌甚、至于三娶皆如初。

又云、李霍事迹、世不甚傳、惟湯顯祖翻案爲紫釵記。鉛印本是「史略」に同じ。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「霍小玉傳」出『廣記』四百八十七、題下注云蔣防撰。防字子微（『全唐文』作微）、義興人、澄之後。年十八、父誠令作「秋河賦」、援筆卽成。于簡遂妻以子。李紳卽席命賦「韞上鷹」詩。紳薦之。後歷翰林學士中書舍人（明凌迪知『古今萬姓統譜』八十六。）長慶中、紳得罪、防亦自尙書司封員外郎知制誥貶汀州刺史（『舊唐書』敬宗紀）、尋改連州。李益者、字君虞、系出隴西、累官右散騎常侍。太和中、以禮部尙書致仕。時又有一李益、官太子庶子、世因稱君虞爲「文章李益」以別之、見『新唐書』（二百三）李華傳。益當時大有詩名、而今遺集荅落、清張澍會哀集爲一卷、刻『二酉堂叢書』中、前有事輯、收羅李事甚備。「霍小玉傳」雖小說、而所記蓋殊有因、杜甫「少年行」有句云、「黃衫年少宜來數、不見堂前東逝波」、卽指此事。時甫在蜀、殆亦從傳聞得之。益之友韋夏卿、字雲客、京兆萬年人、亦兩『唐書』（舊一六五新一六二）皆有傳。李肇（『國史補』中）云、「散騎常侍李益

少有疑病」、而傳謂小玉死後、李益乃大猜忌、則或出于附會、以成異聞者也。明湯海若嘗取其事作「紫簫記。」

『師弟答問集』第二頁云、「増田問曰」一一〇頁 杜甫少年行有云、「黃衫年少宜來數、不見堂前東逝波」、謂此也。

a、「東逝」 or 「東逝波」は熟語ですか？「東」は如何なる意味で用ゐたのでせう？「水東流」式の「東」ですか。

〔魯迅答曰〕支那ニハ大抵水ハ東ニ流ルト云フ。マツ熟語ラシク成テ居マス。〔増田又問曰〕b、「黃衫年少云云」の杜甫の句がイコール謂此也といふのは何か出處がありますか、又は先生自らの發明ですか？〔魯迅答曰〕宋人既ニソウ考ヘマシタ、私ノ發明デハナイノデス。〔増田又問曰〕杜甫が蔣防の「霍小玉傳」を讀んだことがあるといふ假定ですか or 當時その事實的話柄が流傳してゐて、杜甫がそれによつて「黃衫年少云云」と作つたのでせうか？〔魯迅答曰〕杜甫が當時其事實ヲ聽イタダロト云フノデス。蔣防ノ文章ヲ見タノデハナイ。ソレモ宋人ノ推測。

『支那小説史』第九注云、黃衫年少。益を引つばつて來た豪士を指す。黃衫の年少は屢々やつて來た方がよい。悲しい終局を見ないやうに。といふのは悲しみのあまり小玉が死んだのは、益の來かたが遅かつたからで、屢々黃衫の豪士があらはれてこんな男を直ぐ連れて行けば、悲しい女の終末も見ないだらうといふ意。東逝波。小玉の死んだことをいふ。東逝はただ逝に同じ、支那では水は東に流れるものとしてゐたから、東の字をつけたもの。

姚寬『西溪叢語』卷下云、蔣防作霍小玉傳、書大歷中李益事。有豪士衣輕黃衫、挾朱彈筋、李至、霍遂死、乃三月牡丹時也。老杜有少年行二首、一云、巢燕引雛渾去盡、紅花結子已無多、黃衫年少宜來數、不見堂前東逝波。攷作詩時大歷間、甫政在蜀。是時想有好事者傳去、作此詩爾。學津討原本。」杜甫は大歷三年（七六八）三峽を出て翌四年は潭州に居り、その

翌五年（七七〇）潭州から岳州への舟中に死んだとされる。李益は『登科記考』卷一〇によれば、大歷四年進士の第にのぼり、翌五年には諷諫主文科に合格し、十五年後の建中四年（七八三）に拔萃科に合格している。かりに「霍小玉傳」中の時間が現實の時に對應しているとすると、李益の進



士及第が二十歳で大暦三年、任地赴任が二十二歳で大暦五年、そして翌六年三月に霍小玉が死ぬということになる。そうならば、李益の故事が風聞で傳わったとしても、大暦五年に亡くなった杜甫が六年に死んだ霍小玉のことを耳にする道理はまったくない。『西溪叢語』の記事は附會の説ということになる。まして蔣防の「霍小玉傳」そのものとなれば言うを俟たない。増田氏の問いもあるいはそういう疑問から發せられたものか。『全集』注は魯迅の誤解を訂すべきである。

蔣防「連州靜福山廖先生碑銘」『全唐文』卷七一九云、長慶末、余自尚書司封郎知制誥翰林學士得罪、出守臨汀、尋改此郡。

同「汨羅廟記」『全唐文』卷七一九云、唐文宗太和二年春、防奉命宜春抵湘陰。

丁居晦「重修承旨學士壁記」『翰苑群書』上、云、長慶後七人、蔣防、長慶元年十一月十六日右補闕充、二十八日賜緋。二年十月九日加司封員外郎。三年三月一日加知制誥。四年二月六日貶汀州刺史。

『舊唐書』卷一六六元稹傳附龐嚴傳云、嚴與右拾遺蔣防俱爲稹紳保薦、至諫官內職。

又卷一四九于敖傳云、昭愍初即位、李逢吉用事、與翰林學士李紳素不叶、遂誣紳以不測之罪、逐於嶺外。紳同職駕部郎中知制誥龐嚴、司封員外郎知制誥蔣防坐紳黨、左遷信汀等州刺史。

又卷一七上敬宗紀云、長慶四年二月癸未、貶戶部侍郎李紳爲端州司馬。丙戌貶翰林學士駕部郎中知制誥龐嚴爲信州刺史、翰林學士司封員外郎知制誥蔣防爲汀州刺史、皆紳之引用者。

『咸淳毗陵志』卷一六云、蔣防、澄之後。年十八父誠令作秋河賦、援筆卽成。警句云、連雲梯以迴立、跨星橋而徑度。于簡遂妻以子。李紳卽席命賦韞上鷹。詩云、幾欲高飛上天去、誰人爲解綠絲條。紳識其意荐之。後歷翰林學士中書舍人。「知不足齋叢書本。」魯迅が「神邊小綴」で引いた凌迪知『古今萬姓統譜』はそのまま『咸淳毗陵志』に據っていることが分る。

張澍が集めた李益の詩集『李尚書詩集』（二西堂叢書一名張氏叢書所收）には「李氏事蹟」があつて関連する資料を収録する。『郡齋讀書志』『直齋書錄解題』『唐摭言』『因話錄』『霍小玉傳』全文、その末の張澍の按語に『西溪叢語』の杜甫「少年行」云々の指摘がある。ただしそこでは作者を『茗溪漁隱叢話』の胡仔とまちがえている。

なお『唐人說薈』等に蔣防撰と稱して『幻戲志』一卷が収録されているが、これは『廣記』から抜き集めたもので、蔣防の撰とする何の根據もない。

#### ○湯顯祖「紫簫記」「紫釵記」

王國維『曲錄』卷四云、紫簫記一本六十種曲本 紫釵記一本六十種曲本 右五種（略三種）明湯顯祖撰。顯祖字義仍、號若士、臨川人。萬曆癸未進士、除太常博士、稍遷祠部郎。抗疏劾政府、謫廣東徐聞典史、後遷遂昌縣知縣。投効歸。『曲海總目提要』卷六云、紫簫記 明湯顯祖撰。内中情節、言霍小玉觀燈至華清宮、拾得紫玉簫、故以爲名。與紫釵同演李益霍小玉事、而關目迥別。紫釵全據霍小玉傳、此則略引正面、點綴生情。插入唐時人物、不拘年代先後、隨機布置、以示遊戲神通。後略。又云、紫釵記、明湯顯祖作。傳奇中始末皆本唐蔣防所撰霍小玉傳。但傳奇至李益與霍小玉重逢而止、以劍合釵圓節續宣恩作收場、益就婚感氏事不及也。後略。

15 又有許堯佐作「柳氏傳」、以至蓋亦實錄也

六十八

寫印本『大略』九は、「因寄柳于法靈寺」の「因、于」二字なく「則、柳已爲……」の「則」字なく、「其事又見于孟榮『本事詩』」の「又」を「亦」に作り、「于」字なく、「蓋亦實錄矣」の「亦」字なく、「矣」を「也」に作るほかは『史略』に同じ。また鉛印本はまったく『史略』に同じ。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「柳氏傳」出『廣記』四百八十五、題下注云許堯佐撰。『新唐書』（二百）儒學許康佐傳云、「貞元中、舉進士宏辭、連中之。……其諸弟皆擢進士第、而堯佐最先進 又舉宏辭、爲太子校書郎。八年、

康佐繼之。堯佐位諫議大夫。」柳氏事亦見于孟榮『本事詩』(情感第二)、自云開成中在梧州聞之大梁夙將趙唯、乃其目擊。所記與堯佐傳並同、蓋事實也。而述翹復得柳氏後事較詳審、錄之、

後罷府閒居、將十年。李相勉鎮夷門、又署爲幕吏。時韓已遲暮、同列皆新進後生、不能知韓、舉目爲「惡詩。」韓邑邑不得意、多辭疾在家。唯末職韋巡官者、亦知名士、與韓獨善。一日、夜將半、韋叩門急。韓出見之、賀曰、「員外除駕部郎中、知制誥。」韓大愕然曰、「必無此事、定誤矣。」韋就座曰、「留邸狀報制誥闕人。中書兩進名、御筆不點出。又請之、且求聖旨所與。德宗批曰、「與韓翹。」時有與翹同姓名者、爲江淮刺史。又具二人同進。御筆復批曰、「春城無處不飛花、寒食東風御柳斜。日暮漢宮傳蠟燭、輕煙散入五侯家。」又批曰、「與此韓翹。」」韋又賀曰、「此非員外詩耶？」韓曰、「是也。是知不誤矣。」質明、而李與僚屬皆至。時建中初也。

後來取其事以作劇曲者、明有吳長孺『練囊記』清有張國壽『韋臺柳。』

『唐詩紀事』卷四云、許堯佐 康佐諸弟、皆第進士、而堯佐最先進。又舉宏詞爲太子校書郎。八年、康佐繼之。堯佐、貞元十六年與燉煌張宗本、滎陽鄭權皆佐征西府。後位諫議大夫、卒。

徐松『登科記考』卷十三云、貞元十年、賢良方正能直言極諫科 許堯佐 見冊府元龜唐會要 權德輿送許協律判官赴西川序、十年冬予與今左曹相君兵部郎崔君同受詔、禁中雜問對策、以第其等、將命于庭、有請程百職之功緒者、且以郎吏諫曹爲言。時相君爲吏部郎、崔爲右補闕、因相顧曰、直言者方譏切、吾黨其可捨諸。予撫手賀之、以爲得雋。及後詔下、徵他日之詞、則許生也。按許生當卽堯佐。 後略。

『類說』所收的『異聞集』はこの一篇に「柳氏述」という題をつけている。また『詩話總龜』前集卷二十三寓情門に『異聞集』のこの篇の前半を引くが、文章表現にかなりの異同がある。(人民文學出版社版三九頁)

○吳長孺「練囊記」

王國維『曲錄』卷四云、練囊記一本傳奇彙考云與張仲豫合作。六十種曲本 右二種〔略一〕種明吳大震撰。大震字東宇、號長孺、休甯人。』『古典戲曲存目彙考』卷九云、『明清傳奇鈞沈』輯有佚曲一支。

○張國壽「章臺柳」

王國維『曲錄』卷三云、章臺柳一本見曲考 右五種〔略四種〕國朝張國壽撰。』『全集』注云、『清』當爲『明』。張國壽當爲張國壽、明代章邱（今屬山東）人。穆宗時官行唐知縣。所著『章臺柳』雜劇、演『柳氏傳』故事。未見傳本。

16

他如柳瑤、以至亦皆有造作

六十二

鉛印本『大略』八が『史略』と同じほかは、寫印本も「小説的變遷」もこれらの作品に言及しない。

○柳瑤「上清傳」

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、柳瑤「上清傳」見『資治通鑑考異』卷十九。司馬光駁之云、「信如此說、則參爲人所劫、德宗豈得反云『蕃養刺俠』。況陸贄賢相、安肯爲此。就使欲陷參、其術固多、豈肯爲此兒戲。全不近人情。」亦見于『太平廣記』卷二百七十五、題曰「上清」、注云出『異聞集』。『相國寶公』作「丞相寶參」、後凡「寶公」皆只作「寶」字。「隸名掖庭」下有「且久」二字。「怒陸贄」上有「至是大悟因」五字。「老」作「這」。「恣行媒孽」下有「乘間攻之」四字。「特敕」下有「削」字。餘尙有小小異同、今不備舉。此篇本與劉「幽求傳」同附『常侍言旨』之後。『言旨』亦理作、『郡齋讀書志』（十三）云、記其世父柳芳所談。芳、蒲州河東人、子登、冕。登子瑤、見『新唐書』（一三二）。瑤蓋環之從兄弟行矣。

『郡齋讀書志』卷十三小說類云、常侍言旨一卷 右唐柳瑤記其世父芳所著、凡六章、上清幽求二傳附。王先謙校本

『直齋書錄解題』卷十一小說類云、柳常侍言旨一卷 唐柳瑋撰、常侍者其世父芳也。凡六章、末有劉幽求及上清傳。

『新唐志』小說家類云、柳氏家學要錄二卷柳瑋 常侍言旨一卷柳瑋

この他に柳瑋その人についての資料はほとんどない。王夢鷗「陳翰異聞集考論」(『唐人小說研究』二集二頁)が「贊寧『高僧傳』卷二十、載「洛陽香山寺鑑空傳」、末言出於柳瑋作傳。按彼傳亦見於李玫『纂異記』。然則柳瑋作品亦嘗爲當時人所撫拾、而陳翰但居其一而已。」というのがわずかに新しいものである。『纂異記』(『廣記』卷三八八)では「齊君房」という題で、むろん著者は柳瑋ではなく李玫になっている。

テキストは『太平廣記』『資治通鑑考異』『唐語林』卷六があり、『唐宋傳奇集』、汪辟疆『唐人小說』は前二者の校訂をするが、『唐語林』による校訂はされていない。

#### ○薛調「無雙傳」

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「無雙傳」出『廣記』四百八十六、注云薛調撰。調、河中寶鼎人、美姿貌、人號爲「生菩薩」。咸通十一年、以戸部員外郎加駕部郎中、充翰林承旨學士、次年、加知制誥。郭妃悅其貌、謂懿宗曰、「駙馬盡若薛調乎。」頃之、暴卒、年四十三、時咸通十三年二月二十六日也。世以爲中鳩云(見『新唐書』宰相世系表「翰苑羣書」及『唐語林』四)。胡應麟(『筆叢』四十一)云、「王仙客……事大奇而不情、蓋潤飾之過。或烏有無是類、不可知。」案范攄『雲溪友議』(上)載「有崔郊秀才者、寓居於漢上、蘊精文藝、而物產罄懸。亡何、與姑婢通、每有阮咸之從。其婢端麗、饒彼音律之能、漢南之最也。姑鬻婢於連帥。帥愛之、以類無雙、給錢四十萬、寵賜彌深。郊思慕不已、卽強親府署、願一見焉。其婢因寒食來從事家、值郊立於柳陰、馬上連泣、誓若山河。崔生贈以詩曰、「公子王孫逐後塵、綠珠垂淚滴羅巾。侯門一入深如海、從此蕭郎是路人。」詩聞于帥、遂以歸崔。無雙下原有注

云、「即薛太保之愛妾、至今圖畫觀之。」然則無雙不但實有、且當時已極豔傳。疑其事之前半、或與崔郊姑婢相類。調特改薛太尉家爲蔡中、以隱約其辭。後半則頗有增飾、稍乖事理矣。明陸采嘗拈以作『明珠記』。

『新唐書』卷七三下宰相世系表云、漢上五門薛氏大房、……浙西觀察使萍、子膺、婺州刺史。子調。薛昂十一代之孫。

丁居晦「重修承旨學士壁記」『翰苑群書』上云、咸通後三十二人、中略。薛調 咸通十一年十月十七日自□部員外郎加駕部郎中充、十二年正月二十六日加知制誥、依前充、十三年二月二十六日卒官。三月十一日贈戶部侍郎。知不足齋叢書本。『壁記』は「□部」とするが、「唐郎官石柱題名」の戶部員外郎に薛調の名があるから、魯迅はそれに據つたのであらう。

『唐語林』卷四云、薛調、李瓊同年進士。調美姿貌。人號爲生菩薩、瓊俊爽、人號爲劍。調寬恕而瓊猜忌、論者以時人所稱、協其性也。劉元章罷江夏入朝、以風標自任。一日調謁之、倒屣出迎、愛其風韻、去而復留者數四。既去、謂左右曰、若不見其□也。調爲翰林學士、郭妃悅其貌、謂懿宗曰、附馬盍若薛調乎。頃之、暴卒。時以爲中嬖。卒年四十三、常覽鏡曰、薛調豈止四十三乎。豈嘗有言其壽者耶。

『廣記』卷四八六、『綠窗女史』『五朝小說』『唐人說薈』『虞初志』『香齋叢書』第六集、『唐宋傳奇集』、『唐人小說』。なお『類說』所收『麗情集』は「無雙仙客」と題する。

#### ○陸采「明珠記」

王國維『曲錄』卷四云、明珠記一本六十種曲本 一名王仙客無雙傳奇 右五種〔略四種〕明陸采撰。采字子元、號天池。長洲人。列朝詩集。子元少爲校官弟子、不屑守章句。年十九作王仙客無雙傳奇。兄子餘助成之、曲旣成、集吳門教師精音律者、逐腔改定、然後妙選梨園子弟、登場教演、期盡善而後出。性豪蕩不羈、困於場屋、日夜與所善客劇飲歌呼。東登泰岳、賦游仙三章、南踰嶺嶠、游武夷諸山、年四十卒。後略。『曲海總目提要』卷七。

○皇甫枚「非烟傳」

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「飛煙傳」出『說郛』卷三十三所錄之『三水小牘』、皇甫枚撰。亦見于『廣記』四百九十一、飛煙作非煙。『三水小牘』本三卷、見『宋史藝文志』及『直齋書錄解題』。今止存二卷、刻于盧氏『抱經堂叢書』及繆氏『雲自在龕叢書』中。就書中可考見者、枚字遵美、安定人。三水、安定屬邑也。咸通末、爲汝州魯山令。光啓中、僖宗在梁州、赴調行在。明姚咨跋云、「天佑庚午歲、旅食汾晉、爲此書。」今書中不言及此、殆出于枚之自序、而今失之。繆氏刻本有逸文一卷、收「非煙傳」、然僅據『廣記』所引、與『說郛』本小有異同、且無篇末一百餘字。『廣記』不云出于何書、蓋嘗單行也、故仍錄之。『類說』卷二九に收録する「麗情集」は「非煙」とする。

『續談助』卷三「三水小牘」晁載之跋云、右鈔安定皇甫枚所編三水小牘。枚自言天祐庚午歲、寓食汾晉、爲此書。三水、安定郡地名、枚安定人、故云。其末云三水人遵美、蓋其字也。枚又言外王父中書令晉國公、宣宗朝再啓黃閣、蓋謂白敏中。其書卑脚大花鵲吠刺客李龜壽事無甚異、且慮出白氏之私、故不鈔。

『直齋書錄解題』卷十一小說家類云、三水小牘三卷 唐皇甫枚、遵美撰。天祐中人。三水者安定屬邑也。

『宋志』子部小說家類云、皇甫枚三水小牘二卷。『宋志』各本および『崇文總目』傳記類も二卷とする。

姚咨『三水小牘』跋云、三水小牘二卷。唐皇甫枚天祐庚午歲、旅食汾晉、爲此書。中多仙靈鬼異之事、余正德辛巳春、偶於暨陽葉潛夫處得數則、已疑其說郭中勳出。今年夏五月、倭夷入寇、顧山周汝學氏避寇僑居吾邑城之南、倉黃邂逅、遽云、家雖殘毀、幸而圖籍無恙、卽出一編、乃三水小牘二卷也。蓋爲海虞楊正郎家藏。余欣然假歸、冒暑錄之。於平、兵戈搶攘、不忘筆硯、若吾二人、誠古之所謂奇癖之士、今之所謂癡絕者耶。書已一笑。嘉靖甲寅秋七月四日、句吳六十樗老姚咨識。『抱經堂叢書』本。

盧文弨『三水小牘』序抱經堂叢書云、此書同里湯秀才典三於故書叢殘中得之、以示余、乃舊梓本。作此書者、安定皇甫枚也。枚在唐懿宗咸通末、爲汝州魯山縣令、僖宗之在梁州、赴調行在。此皆見書中可考者也。明嘉靖間、吳中姚樞老鈔是書、謂枚於天佑庚午歲、旅食汾晉、爲此書。此必見枚之自序中、不然姚何以知之。此序余未之見、世倘有斯序者、幸畀余以弁諸首、庶尤完善也。此書雖多靈鬼異之事、然所載烈丈夫如董漢助、烈婦人如李庭妻崔氏、殷保晦妻封夫人、皆凜凜有生氣。郊城令遇賊偷生、而下卽繫之以崔氏之罵賊被殺、此與歐陽傳唐五臣而以一婦人相形、意亦相似。可興可觀、有裨世教。又如紀夏侯禎事、而知神靈不可褻瀆、紀嚴郇事、而知婦女不可入廟、其垂戒亦深切矣。善讀者當以是求之。又案天祐庚午、唐亡已四年矣、時晉猶稱天祐、而枚亦稱之、其不臣二姓亦可見。此書烏可使之不傳乎。乾隆壬子十月、盧文弨書於常州之龍城書院。

『廣記』卷四九一、明抄『說郭』卷三三、『虞初志』、『綠窗女史』、『唐人說薈』、『香齋叢書』第六集、『唐宋傳奇集』、『雲自在龕叢書』、『唐人小說』、中華書局本『三水小牘』等。

○房千里「楊娼傳」

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「楊娼傳」出『廣記』四百九十一、原題房千里撰。千里字鶴舉、河南人、見『新唐書』宰相世系表。『藝文志』有房千里『南方異物志』一卷、『投荒雜錄』一卷、注云、「大和初進士第、高州刺史」、是其所終官也。此篇記敘簡率、殊不似作意爲傳奇。『雲溪友議』(上)又有「南海非」一篇、謂房千里博士初上第、游嶺徼。有進士韋滂自南海致趙氏爲千里妾。千里倦游歸京、暫爲南北之別。過襄州遇許渾、託以趙氏。渾至、擬給以薪粟、則趙已從韋秀才矣。因以詩報房云、「春風白馬紫絲韁、正值蠶眠未採桑。五夜有心隨暮雨、百年無節待秋霜。重尋繡帶朱藤合、卻認羅裙碧草長。爲報西游減離恨、阮郎纔去嫁劉郎。」房聞、哀慟幾絕云云。此傳或卽作於得報之後、



聊以寄慨者歟。然韋穀『才調集』(十)又以渾詩爲無名氏作、題云、「客有新豐館題怨別之詞、因詰傳吏、盡得其實、偶作四韻嘲之。」

『新唐書』卷七二下宰相世系表云、河南房氏、……說、右司郎中。生夷則。夷則生千里、字鵠舉。

『唐詩紀事』卷五二云、房千里、中略。千里以罪居廬陵、作所居竹室記云、予方窮、不能奮、其處于是、亦宜矣。中略。馬使君與千里俱貶端州、李羣玉留別詩云、俱來海上嘆煙波、君佩銀魚我觸羅。經國才微甘放蕩、專城年少豈蹉跎。應憐旅夢千重思、共愴離心一曲歌。唯有管絃知客意、分明吹出感思多。

『廣記』卷四九一、『虞初志』、『綠窗女史』、『唐人說薈』、『唐宋傳奇集』、『唐人小說』等。

17 而杜光庭之『虬髯客傳』、以至有『紅拂記』

六一二

寫印本『大略』九云、唐人雜說中、亦間記豪俠之事、然無專書、別行者殆惟虬髯一傳、太平廣記類爲四卷(一百九十三至九十六)、明人別刻之、改名劍俠傳、妄題段成式作。然亦以此流行世間、如紅拂崑崙隱娘紅線、明以來即傳爲美談者、皆出乎此。鉛印本是「紅拂記」也、と「也」字がつくほかは「史略」に同じ。

『小説的變遷』第三講云。唐人小説中的事情、後來都移到曲子里。如『紅線』、『紅拂』、『虬髯』……等、皆出于唐之傳奇、因此間接傳遍了社會、現在的人還知道。至于傳奇自身、則到唐亡就隨之而絕了。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「虬髯客傳」據明顧氏『文房小説』錄、校以『廣記』百九十三所引「虬髯傳」、互有詳略、異同、今補正二十餘字。杜光庭字賓至、處州縉雲人。先學道於五台山、仕唐爲內供奉。避亂入蜀、事王建、爲金紫光祿大夫、諫議大夫、賜號廣成先生。後主立、以爲傳真天師、崇真觀大學士。後解官、隱青城山、號東瀛子。年八十五卒。著書甚多、『有諫書』一百卷、『歷代忠諫書』五卷、『道德經廣聖義疏』三十卷、『錄異記』十卷、『廣成集』

一百卷、『壺中集』三卷。此外言道教儀則、應驗、及仙人、靈境者尙二十餘種、八十餘卷。今惟『錄異記』流傳。光庭嘗作「王氏神仙傳」一卷、以悅蜀主。而此篇則以窺視神器爲大戒、殆尙是仕唐時所爲。『宋史藝文志』小說類著錄作「虬髯客傳一卷。」宋程大昌『攷古編』(九)亦有題「虬髯傳」者一則、云、「李靖在隋、常言高祖終不爲人臣。故高祖入京師、收靖、欲殺之。太宗救解、得不死。高祖收靖、史不言所以、蓋諱之也。」「虬髯傳」言靖得虬髯客資助、遂以家力佐太宗起事。此文士滑稽、而人不察耳。又杜詩言「虬髯似太宗。」小說亦辨人言太宗虬髯、髯可挂角弓。是虬髯乃太宗矣。而謂虬髯授靖以資、使佐太宗、可見其爲戲語也。」髯皆作鬚。今爲虬髯者、蓋後來所改。惟高祖之以收靖、則當時史實未嘗諱言。『通鑑考異』(八)云、「柳芳『唐曆』及『唐書』靖傳云、高祖擊突厥於塞外。靖察高祖、知有四方之志。因自鎖上變、將詣江都、至長安、道塞不通而止。」案太宗謀起兵、高祖尙未知。知之、猶不從。當擊突厥之時、未有異志、靖何從察知之?又上變當乘驛取疾、何爲自鎖也?今依「靖行狀」云、「昔在隋朝、曾經忤旨。及茲城陷、高祖追責舊言、公忼慨直論、特蒙宥釋。」柳芳唐人、記上變之嫌、卽知城陷見收之故矣。然史實常晦、小說輒傳、「虬髯傳」亦同此例、仍爲人所樂道、至繪爲圖、稱曰「三俠」。取以作曲者、則明張鳳翼張太和皆有「紅拂記」、凌初成有「虬髯翁」。

『全唐文』卷九二九杜光庭小傳云、光庭字實至、縉雲人。一曰長安人。咸通中、應九經不第、入天台山學道。從僊宗幸興元、留蜀事先主、爲金紫光祿大夫諫議大夫、封蔡國公、賜號廣成先生。遷戶部侍郎、後主立、授道籙於苑中、以爲傳真天師崇眞館學士。後解官隱青城山、號東瀛子、年八十五卒。魯迅が杜光庭の履歷について何に據ったのか不明であるが、この小傳の記述が最も近い。まとまった傳としては清吳任臣『十國春秋』卷四七に「杜光庭傳」がある。魯迅は『錄異記』のみの流傳をいうが、實際には『道藏』の中に『壺城集仙錄』はじめ、一部分ながら『廣成集』なども收められていて、かなりのものが残っている。

『郡齋讀書志』卷九傳記類云、王氏神仙傳四卷（袁本無四卷二字）右蜀杜光庭纂。光庭集王氏男真女仙五十五人、以詔王建。其後又有王虛中續纂三十人附於後。王先謙校本。

『直齋書錄解題』卷二神仙類云、王氏神仙傳一卷 杜光庭撰。當王氏有國時爲此書、以媚之。謂光庭有道、吾不信也。『虬髯客傳』については、早く胡適が短篇小説、歴史短篇小説として評價している（『論短篇小説』民國七年。『胡適文存』第一集卷一所收）。作者については、最近の研究はいずれも杜光庭説を否定する。王夢鷗「虬髯客與唐之創業傳說」（『唐人小説研究』第四集）は作者の特定はしないが、杜以前の作だとし、程毅中『古小説簡目』（一九二・中華書局）は「虬髯客傳」存。有『豪異祕纂』本、『顧氏文房小説』本、『神仙感遇傳』本。唐・張説（？）撰。有兩本。『太平廣記』卷一九三引作「虬髯傳」、無作者名。『豪異祕纂』本署張説撰、『顧氏文房小説』本署杜光庭撰、均爲繁本。『道藏』本、『雲笈七籤』本『神仙感遇傳』及『唐語林』（卷五）所載爲簡本。按『直齋書錄解題』小説類著錄『豪異祕纂』一卷、云「無名氏所錄五事、其扶餘國王一則、卽所謂虬髯客者也。」原本『說郛』卷三四所收『豪異祕纂』中、正有此篇、題張説撰。明刻『虞初志』志二及清刻『說郛』、『五朝小説』、『唐人説書』等亦題張説撰。『崇文總目』、『通志・藝文略』傳記類並不著撰人。『宋史・藝文志』小説家類始署杜光庭之名。唐末蘇鶚『演義』卷下云、「近代學者著『張虬髯傳』、頗行於世。」蘇鶚與杜光庭同時人、所稱近代學者心非指杜。疑因杜光庭節取舊編入『神仙感遇傳』、故傳爲杜撰。今以繁本屬張説撰。」と述べる。さらに李宗爲「唐代傳奇『聶隱娘』『虬髯客』作者辨」（『中國古典小説戲曲論集』二集・一九七）は『紺珠集』に「紅拂妓」を裴劍の『傳奇』として引くことから、「虬髯客傳」を裴劍の作品とする。

○凌初成「虬髯翁」

王國維『曲錄』卷三云、虬髯翁一本盛明雜劇本 右二種〔略一種〕明凌初成撰。

○張鳳翼『紅拂記』

王國維『曲錄』卷四云、紅拂記一本六十種曲本 右七種〔略六種〕明張鳳翼撰。鳳翼字伯起。長洲人。

○張太和『紅拂記』

王國維『曲錄』卷四云、紅拂記一本見曲品、曲海目。明張太和撰。太和號屏山。錢塘人。」「古典戲曲存目彙考」卷九作「紅拂傳、佚。」

18 上來所舉以外、以至每以小說視之

六—四

寫印本『大略』九云、上文所舉之外此類尙多、如失名之李衛公別傳李林甫外傳郭湜之高力士傳等皆是。但作者初意、或本非傳奇、第以行文曼衍、拾事又復瑣屑、故後人亦常以小說視之。鉛印本是「史略」に同じ。

○「李衛公別傳」

汪辟疆『唐人小說』按語云、按此條『古今說海』、題「李衛公別傳」、無名氏撰。明人刻書、類皆展轉逐錄、不究所出、其實『太平廣記』四十八已引之、下注出『續玄怪錄』。宋臨安書棚本、亦收入卷末。則此文固李復言撰也。文中敘行雨一段、極有精采。

趙景深「關於『中國小說史略』」『中國小說叢考』云、六、「尙有不知作者之『李衛公別傳』。」按『李衛公別傳』這名稱是『古今說海』弄的玄虛、魯迅上了當。實際此篇原名「李衛公靖」、作者李復言、并非不可考。此篇原收入『續玄怪錄』、不是獨立的單篇、改頭換面、便使人摸不着頭腦了。

『廣記』卷四一八、『續玄怪錄』卷四、『古今說海』說部部、『舊小說』、『唐人小說』。

○「李林甫外傳」

程毅中『古小説簡目』（中華書局・二六）は「李林甫外傳……即『太平廣記』卷十九「李林甫」條、出『逸史』（二三頁）といい、又『逸史』……宋葉夢得『避暑錄話』卷上記白樂天海山事引作盧肇『逸史』、今據以定爲肇作。」（六八頁）という。『廣記』卷一九所載のものは通行する『古今說海』本所收などとほとんどちがわないから、程氏の説によれば、これも「李衛公別傳」と同様、「作者不可考」でも單行でもなく、盧肇撰『逸史』の一篇ということになる。しかしわたしの考えでは、盧子が盧肇たる可能性はあるものの、決定的な證據を缺いており、輕々に判斷できないと思われる。拙稿『盧子逸史校注』（神戸市外國語大學『外國學研究』第二二號『中國舊小説研究』所收）「逸史考」の著者の項を参照されたい。

『新唐志』小説家類云、盧子史錄卷亡。又逸史三卷大中時人。

『宋志』小説家類云、盧氏逸史一卷……並不知名。

明抄本『說郭』卷二四『逸史』序云、盧子既作史錄畢、乃集聞見之異者、目爲逸史焉。其間神化、交化、幽冥感通、前定升沈、先見禍福、皆撫其實、補其缺而已。凡紀四十五條、皆我唐之事、時大中元年八月。商務印書館排印本。

『廣記』卷一九、『古今說海』說淵部、『說郭』宛委山堂本二三、『五朝小説』、『唐人說舊』四集、『唐代叢書』四集、『唐元小説六種』、『舊小説』乙集。

○郭湜「高力士外傳」

『新唐志』雜傳記類云、郭湜高氏外傳一卷力士。湜、大曆大理司直。

『直齋書錄解題』卷七傳記類云、高力士外傳一卷 唐大理司直鄭湜撰。「鄭」とするのは「郭」の誤。小説本文中に「大理司直太原

郭湜」とある。

『顧氏文房小説』、『虞初志』卷六、『說郛』宛委山堂本一一一、『五朝小説』、『唐人說薈』四集、『唐代叢書』四集、『龍威秘書』四集、『唐開元小説六種』、『舊小説』。

○姚汝能「安祿山事迹」

『新唐志』雜史類云、姚汝能安祿山事迹三卷華陰尉。

『直齋書錄解題』卷五雜史類云、安祿山事迹三卷唐華陰尉姚汝龍撰。〔龍〕は〔能〕の誤。

『學海類編』史參、『唐開元小説六種』。

(一九九〇・七・八)